

■学位論文内容要旨

## 貧困がもたらす心理的要因についての考察

—貧困観という視点—

北野 大地 (2019年度修了)

### 研究背景

貧困という社会問題はその性質上経済的な要因が起因となって発生する。しかしその経済的な問題を抱えているのは人間であり、だからこそ経済的な問題は心理的な問題にも影響を及ぼすこともまた確かである。心理的な問題とは生活への不安や人生への活力の低下から精神病の発症まで様々である。経済的な問題は是正が難しいと言われている今の日本社会で、少なくともそこから派生する心理的な問題に及ぶ影響について追究したい。

そこで今一度貧困の実態について慎重に検討した上で、貧困観という側面からの検討を加え、社会の実態から心理的要因の可能性を探りたいという思いのもと、研究を進めた。

### 方法

文献を用い、適宜データも活用して、研究を深める。第二章では青木紀の行った貧困に関する意識調査のアンケート結果を用いて、考察をする。

### 考察

まず第一章では、格差問題や貧困問題が取りざたされるようになった2006年ごろから今にかけての貧困の実態について確認するとともに、考察した。それはのちに見ていく貧困観との関連性について必要になり、そもそも現代の貧困観が形成されたのはメディアが貧困問題

について触れ始めたその頃だと考えたからである。実態についてはまず現代の社会構造から確認する必要があるため、日本の学歴社会構造に注目して論を展開した。現代社会においては学歴と実力とは伴わないであるとか、学歴で人材を選んではいないであるとか、そういった表面上の学歴無関係の視点はあるものの、学歴主義は現代社会の特徴として根強く残っているものであると言える。

次の第二章では、貧困観という観点から見た貧困問題について考察した。貧困観とは簡単に言えば貧困の知覚・理解・認識であり、人々が貧困というものに対し抱いている価値観や見方である。「観」という言葉からも分かるようにそれには共通性があり、それはまた人間観や道徳観、社会観ともリンクしている点がある。この貧困観はある意味で貧困がもたらした、人々への心理的影響の結果として捉えることができると考えている。あるいは心理的要因と貧困とをつなぐものとして考察を深めた。

ここで明らかになったことは、貧困概念や貧困という現象のイメージすらも共有されていないということである。歴史的な経緯や言葉の問題、とくに現代では、空間による時間差がなくなってしまったことが新たな要因として大きく影響を及ぼしているということだ。貧困というものがアカデミズムの世界でも十分な議論がなされていない上に、今日貧困の特質・特徴を説得的に一般的に誰でもわかるような形で説明できていないことが弱点であった。また貧困が社会問題としてある程度意識され始めてきたことは確かであるように思われるが、個人の努力によって格差が縮まると考える「個人責任説」の存在は依然として強く残り、それを否定する人も少ないように思われるということである。

そして最後の第三章では、貧困がもたらす心理的要因について考察した。ここまでの章で論じてきた貧困の実

態と貧困観とを繋げて、その変遷やあり方について考察し、どのように貧困が心理的要因や貧困観を形成するのかを考察した。

## 結論

筆者はこの研究を貧困問題に対する一種の打開策ないし、そうまではいかなくても貧困問題の緩和などにつながるのではないかと考えていた。貧困問題に対する経済的な援助は現状その整備が不十分な点はいくつもある上に、整備されていたとして、貧困問題を抱えている人がその存在に気づけるような余裕がなかったり、知識の持ちようが不十分であったり、また自分が貧困問題の中にいることにすらまだ気づけていないような現状があった。この物理的な問題の壁を私は個々人の価値観の変容や視点の変換により、解決まではいかずとも生活を少しでも豊かにできるような動きになると考えていた。しかし問題は簡単ではなく、むしろ研究を進めていくうちに貧困という問題の複雑性であったり、貧困観の重層的構造を確認していくことになった。また個人責任説を免れまいとするばかりに社会要因だけに貧困問題の「責」を

押し付ける危険性についても確認できたのではないだろうか。個人的責任と社会的要因の間には相互補完作用が常に付きまとい、それを無視してはこの問題の本質を見逃してしまうのではないだろうか。

筆者はこれからの時代において人々の貧困観はより成熟していくと感じた、そして同時にそう望んでもいる。しかし気をつけなくてはいけないのは、その成熟の仕方は今までのものとは違うということである。今までは様々な生活の経験や親からの伝達で構築されていた貧困観は、今やメディアやインターネットを通じて、その膨大な情報の海へと晒されている。そしてこれからもインターネットやそれに関わる情報化社会は進歩していくと考えると、人々の価値観や諸表象のこれからの成熟・変容の過程は想像しがたいものがある。貧困という社会問題においては様々な理論的知識や歴史の上に人々の価値観であったり、社会的意識が膨大に積み上がり、その全体像を構築している。そしてその上には今まさにこの時を徐々に塵のようにそれらは積み上がっているのではないだろうか。それをかき分けて本質を捉えようとすることは到底無理であると考えている。積み上がっていく個々人の貧困に対する考えや想い一つ一つが変わっていくことに未来はあるのではないだろうか。